原生動物学会座談会

日本原生動物学会の生い立ち

参加者： 渡辺良雄・樋渡宏一・高田季久・盛下 勇
高橋三保子（日本原生動物学会長、司会）

日時： 平成14年11月23日
場所： 高知市・サンライズホテル
記録・編集： 高橋三保子・洲崎敏伸

阿部徹先生と学会の黎明期

高橋三保子: 本日は、お集まりいただきまして、ありがとうございます。今年から、ご存知のこととは思いますが原生動物学雑誌を年に２号発行することにいたしました。それで、これからの原生動物学雑誌にどのような内容の記事を掲載していくことにしようかという議論をしている中で、いわゆる研究内容だけではなくて、分野の生き生きした様子がわかるような雑誌にしていきたいということが上がってきました。その一つの企画として原生動物学会がどういうふうに、どういうことを期待して発足したんだろうかということを、われわれも含めて少し知らないというか、昔のことになってしまいかねないので、昔のことをご存知の方にその当時のお話しを伺えないかと、それをできれば若い学会員にも知らせるといういうことが雑誌でできればいいんじゃないかということで、企画されたわけです。それぞれの皆さんの言葉で話されたことを記事にいたしますので、是非貴重なお話しをうかがえればと思います。どういうことをうかがいたいかというと、一つは学会発足のいきさつ、それからできれば発足当時のエピソードなどを、それからもう一つは、これからの学会に期待することと、というようなことで、お話しをうかがいたいと思います。今日は、本当にお忙しいところをありがとうございます。発足当時のことを思い出していただきたいということがありまして、今日は尾崎先生からいただいた資料や、高田先生からお送りいただいた資料なども準備いたしました。最初は、どういうきっかけでこの学会が発足したかというところからお聞かせいただけないでしょうか。

渡辺良雄: それは、樋渡先生のほうが私よりも経緯を知ってるかもしれないけど、僕が知ってる限りではね、1953年に日本動物学会で、初めて原生動物に関するシンポジウムをやったんですよ。その時に、京都でやったものですから、中村健二先生が大会長だったわけです。それで、阿倍徹先生を、とにかく嫌がるのを引っ張り出して、シンポジウムでベルコーサタイプのアメーバの運動というようなことをしゃべってもらったわけです。

高橋三保子：何てタイプ？

渡辺良雄: ベルコーサ。今、法政で持っている*Amoeba proteus*は、故石井さんが行田の辺から採集したもんなんで、*Amoeba verrucosa*ってのはもう少し小さくってね。阿部先生は写真が好きでしたから、とにかく位相差顕微鏡でパチパチ写真を撮って、どこにmotive forceがあるかというような点で議論してたわけです。これは大変に有名な話なんだけど、アメーバ運動っていうのは、MastとPantinというのが、後ろからのcontractionで前のほうに流れが行くっていうね、すごい理論をちゃんと立てていた。そういうものに対して、いや前から引っ張るんだという、そういう説を出しかけていたんです。それで、そのシンポジウムを企画した京大の中村健二先生はそれを聞いてえらく感激したんですよ。佐藤英美さんが、あそこでゾウリムシをやっていたんですよね。ゾウリムシの核の構造みたいなことを。本当は中村先生はそういうご専門じゃないんだけど・・

樋渡宏一: あのね、その辺のいきさつのことだけどね、中村健二さんはオリンパスの位相差顕微鏡に関係して、いろいろとヘルプしたんだ。そん時に、生の細胞を見るのに原生動物を使ったんだ。それでね、中村健二先生は全然原生動物を使った研究をやったことはないけども、そのオリンパスに協力するために、サンプルとして原生動物を使って、こりゃ面白いってんで、佐藤英美君にやらせてたんだ。

渡辺良雄：あ、そうなんだ。で、たまたまその佐藤英美氏が、大核のクロモソームとかクロモネマとか、そういう大核の構造を位相差なんかで見ていたんだけど、阿部先生は東京文理大で非常勤講師をされてて、齊藤實さんが講義を聞いていたんだ。そいで、一番弟子みたいな格好だった。齊藤さんと佐藤さんは非常に似た仕事をしていた。で、そういう意味で、お互いのボスが知り合ったんだろうと思うんですよ。今でも動物学会でいろんなシンポジウムをやりますけれど、そういうことの走りだったんですね。

高橋三保子：あ、すると、日本動物学会の大会の時に、中でシンポジウムをやってたんですね。

渡辺良雄：そう、阿部先生は一匹オオカミ的だったからね。中村健二先生が出てらっしゃいということでシンポジウムをして、あの、ま、これは阿部先生が自慢して僕に話してんだからホントかどうか知りませんけれど、すごく好評だったんですね。おそらく樋渡さんは聞いてるんだと思うんですよ。その後で、動物学会の時にシンポジウムを開いたり、あるいは独立に原生動物学のシンポジウムを開きたいというふうに考えたのは阿部先生なんです。是非、こういうことをやりたいっていう風にね。

高橋三保子：あの、そうすると、最初のは何年？

渡辺良雄：１９５３年。京都でね。

高橋三保子：ああ、そうですか。そうすると、学会の発足はいつ？

渡辺良雄：いや、まだ、あの、いろんなことがあってね。

高橋三保子：はいはい。

渡辺良雄：それで、アメーバ運動みたいなことの研究をある程度日本でもやっている先生がいるって話になって、神谷宣郎さんも粘菌を使ってましたから、原形質流動とか、いろんなことに興味があったんですね。で、神谷先生は海外の学者とすごくいろんな意味で知り合いだったんですね。ヨーロッパにもアメリカにも友達がいたんです。そして、えーと確か１９６３年にプリンストンでね、国際細胞生物学会が開かれたんです。第一回です。で、その時に、アメーバ運動の、原形質流動っていうかな、そういうことをテーマにした講演がいくつか並んであったんです。しかもそれが本になった、そういう経緯があったんです。その頃、阿部先生は一年間サバティカルみたいな格好で、法政大学を休んで、海外に行ってたんですね。その国際学会で阿部先生も発表したんだけど、当時Bob Allenがやはり、MastやPantinの説とは違って細胞の前からmotive forceがあるっていう、そういう説を出し始めていたわけですよ。それで、阿部先生と大論争になっちゃったわけよ。向こうでね。業績集をまとめるに当たっては、Bob Allenとの間をどうしたらいいのか、神谷先生がえらい苦労されてましたよ。どこかのところに阿部先生が書いてますけど、飛行機の切符はね、ニューヨーク・ブリュッセル、ブリュッセル・ロンドン、とこの４枚しか買っていかないで、世界に出たわけ。で、結局、僕が留学してたブリュッセルに来てて、僕もまあ、一週間か二週間くらい居るんだろうなと思ったら、半年付き合わされたんですよ。

高橋三保子：阿部先生に？

渡辺良雄：そう、阿部先生に。そばにいたんです。その頃、アメーバ運動というか、原形質流動がどう起こっているかということに関して、僕が行ったところのボスだったジョン・ブラッシェという人が、The Cellっていう本を３冊くらい連続して出した人ですけどね、彼ともぶつかってた。それでもう、大変だったの。ブラッシェって人は今まで形態でエンブリオロジーをやってたのが、ケミカルエンブリオロジーに切り替えたパイオニアなんだね。

高橋三保子：そうすっと、アメーバ運動の国際的な論争の当事者であったわけですか？

渡辺良雄：そう、そう、そう。ただし、Bob Allenがやったやり方であっても、motive forceが先端にあるってことが証明できてるって話じゃないんでね。阿部先生がやった仕事っていうのも、とにかく動いてるアメーバを顆粒がどこへ行ったのか、何秒で露出するとここの顆粒がどこに動いたとか、表面につけたカーボンがどう動いたとかね、そういうことで先端からmotive forceがきてるんだと、後ろからのコントラクションはpassiveなものだとか、そういうことを言ったわけ。僕のところに６ヶ月以上いたと思いますけれど、ペンションを借りて。で、とにかく食ってるものも歯が悪いからね、牛乳とパンと、それから臭いチーズと、その三つがあれば生きているわけですよ。

高橋三保子：そのころおいくつだったわけですか、阿部先生って？

渡辺良雄：えーっと、60前ですね。55くらいだったかな、僕が30くらいだったから。それで、その中でだんだんわかってきたことがあるんですね。アメリカに行ったときに、アメリカの原生動物学会が結構盛んだった。会員も400やそこらへんはいたんだと思うんだけど、それで、その当時の知り合いの分類学のコーリスと、よく話をしてい

左より、高田季久・樋渡宏一・高橋三保子氏。

たんだけれど・・

高橋三保子：コロビス？

渡辺良雄：コーリス、あのCorlisさんだよ。そいで、私が留学していたブリュッセルに阿部先生が半年ほどいた中で、ちょっとイギリスに行って来るとかね、ちょっとドイツに行って来るとかね、そういう旅行していた時期があるの。そいで、ドイツに行ってね、チュービンゲンにGrellって有名な先生がいたわけ。で、このGrellは、原生動物のこんな立派な本を出してますし、割とオールラウンドな先生だった。その弟子がHeckmannであり、Ammermannであるのです。で、そのGrellのところに行って、すごくやっぱり共感を得たわけね。ドイツの原生動物学会はどうなってんじゃいというような、そういうことがあったようです。それで、原生動物学会で、第一回の会合っていうか、国際会議っていうのが、プラハであったのかな、そん時に日本人で出たのは柳生先生だけだったの。で、CorlisにもGrellにも、国際原生動物学会に日本の代表がちゃんと出なさいねっというような風に言われてたわけね。それで、阿部先生の思想っていうのは、こういう思想だったんです。アメリカの学会がそれぞれの個々の国の学会を支部として取り扱って、アメリカだけが頂点にいるような、そういうのが大嫌いで、だからみんなインデペンデントのそれぞれの国の学会が、それぞれちゃんとしっかりして、そしてインターナショナルのコングレスを開こうと、そういう思想だったんですよ。英国だけがアメリカのSociety of Protozoologistsの支部になっちゃってたんだ。イギリス。で、阿部先生がたまたまイギリスへ行ったときにそこの支部長をやってた、あの、Adamって人に会ったんですよ。それで、帰ってきてからね、「いやー、良かったよ、イギリスに行って。俺が言っている意見が割と聞かれた。」ってことを、さんざん言ってましたよ。

高橋三保子：でも、これはまだ原生動物学会が発足する前だったんでしょ？

渡辺良雄：前、前、前。それで、阿部先生は今言ったみたいに、個々の国がそれぞれ学会をちゃんと持って、その学会の中から国際学会を、政治とか経済とかいろんなことを排除して、平等の立場で学問的に純粋に集まろうという意図を持っていた。それで、あれは、第一回の国際原生動物学会というのが、コーリスがコーディネートして、プラハで開いたらしいんですけど、1961年だったかな、そんなもんなんです。それで、その次の1965年をロンドンで開くことになったから、是非阿部さんも出ていらっしゃいと、そういう風に言われて帰ってきたわけです。要するに各国の主要なメンバーっていうのには、阿部さんはとにかく会ってたんですよ。アメリカだとHutner、Corlisそういうところがまあ、強かったんです。それで、イギリスにはそのAdamとGreyとか、そういう人達がいたわけです。で、ドイツはGrellがトップにいたわけです。で、そういう中で、初めはインターナショナルコミッティーの中で、アメリカが牛耳ろうとしていたやつをね、強引にコミッティーに規約を設けて、ちゃんと独立した各国の学会がちゃんとした方がいいと、そういう調子で帰ってきたわけですね。第二回の時に参加したのは、阿部先生が参加したのと同時に、柳生さんも行ってたわけですよ。

樋渡宏一：小泉さんもじゃありませんか？

渡辺良雄：そうそう。それと同時にね、猪木先生が、なんかナイロビの辺からね、ロンドンに一緒に参加したらしいんですよ。それで、猪木先生とその時に知り合ったんじゃないかなと思います。

高橋三保子：で、それまでの間にね、原生生物学シンポジウムというのを毎年やっていたみたいですね。初期のころは原生生物はuni-cellularかnon-cellularか、なんかそういう討議もあったみたいで。

渡辺良雄：そう、そう、そう。

高橋三保子：毎年やっていて、それでこのシンポジウムが、国際的な流れと一緒になって学会にしようということになっていったんでしょうかね？

渡辺良雄：そうです。

樋渡宏一：結局、そうだよね。

盛下 勇：京都の動物学会の時ですよ。宮地伝三郎さんも同級生なんですね。それで、宮地先生が、そこまでやるんなら学会を作ったらどうかという話になったんだそうです。それで、一応学会らしき

ものはできたんです。一回。ところが、中心になりそうな先生方みんな日本から留学してしまって、阿部先生のまわりにあまり人がいなくなっちゃって。お前悪いけど行ってこいということで、猪木先生に会ったり、尾崎先生に会ったりして、何とかしましょうよってことになったんです。だから一回出来上がっているわけですよ。

高橋三保子：ああ、学会が。

盛下 勇：ええ、それが、記録として残ってないだけです。

樋渡宏一：それはね、僕もそのへんのいきさつをちょっとうろ覚えで知ってるけども、すぐつぶれちゃったんだ。

渡辺良雄：阿部先生は個性が強くて独断的だから・・・、まとめるの苦手だった・・・・。

樋渡宏一：なんかね、自分の意見が通らないと怒ったひとだったから。

渡辺良雄：そう。

盛下 勇：でも、先生方が、みんなヨーロッパやアメリカに行ったでしょ、あの後一人で寂しがってたんですよ。

樋渡宏一：ああ、ほんと。

高橋三保子：そうすると、芽としては1953年が始まりかもしれないんだけども、第一回の発足までには、いったんできかかって、それがちょっと頓挫しかかったという時代があって、それでもシンポジウムは細々と続けていたと。細々というか、毎年続けていたと・・

盛下 勇：はい、続けていました。それで、誰かまとめてくれる人はいないかというのが、阿部先生の気持ちだったんです。人がいないんですから。

渡辺良雄：いや、そうじゃなくってね、それより前にね、そのシンポジウムをやってる頃に、学会にしたかったわけね。それで、とにかく幹事みたいな人を、原生動物をやってない人たちも集めてね、会合をしたんですよ。誰が出たかっていうと、当時日本の著名な動物学者の牧野佐次郎さんとか団勝麿さん、それから丘英通さん・・・

盛下 勇：その前に、1953年以来、9回シンポジウムをやってきたのは、原生動物学会を作りたいと、そういう意思表示だったわけでしょ。それで、この発起人で、立ち上がったんですよ。

渡辺良雄：いや、立ち上がったんじゃなくって・・

高橋三保子：いや、でも、これ1962年ですよ。

渡辺良雄：そう。

高橋三保子：だから、第一回は、もう・・

渡辺良雄：それの前にね、59年だか60年だかに、さっきいった原生動物に関係ない人たちが集まって、呼びかけ文のようなものを作ったりしたわけよ。そんな関係ない分野の先生が幹事になったり評議員になったりするような学会なんてつぶれちゃうからやめてくれって、そういうことを阿部先生の弟子の一人として言ったりしました。ただし、何が一番学会を作りたかったかというと、阿部先生が世界連合に出た時にですね、International Comissionをどういう風に作ろうかという議論が出たんですよね。そん時に、阿部先生が十人委員会の一人になっていたわけです。これで、じゃアメリカの属国じゃないようなところをどのようにCommitteeに入れていこうかという時に、なんか会員20人以下の代表はCommitteeのメンバーになれない、20人以上50人までは一人出しなさいとか、50人以上は二人Committeeに出してもいいとか。そいで、アメリカはその時に400人くらい学会員がいたから、コミッションのメンバーに3人か4人いて、で、日本は学会がないがっていうように言われているわけね。それで、なんとか学会、あるいは原生動物をやっている人数がこれくらいいるよってことを言いたかったために名簿を作ったんです。

渡辺良雄氏（左）、盛下勇氏（右）。

樋渡宏一：あ、そうですか。

渡辺良雄：そうですよ。こん中には原生動物なんかやってない人だっていっぱいいますよ。

高橋三保子：生物学のそうそうたるメンバーが名を連ねていますよね。この呼びかけには。研究者名簿というのでね、二百何人は名前が載っているんですよ。

渡辺良雄：だから、なぜ二百何人載せたかっていうと、そういうふうにやりたかったんだね。この、Formation of an International Commission on Protozoologyの3番のところに書いてありますけど、コミッションの委員を2人出すには、100人以上欲

第２回日本原生動物学会で撮影された参加者の集合写真。前列左から２人目が阿部徹氏。前列左から３人目が猪木正三氏。学会は、大阪大学微研で行われた。

しかったんです。確かこれは日本語になってるけど、阿部先生がSociety of Protozoologyの会長か何かに、日本には200人くらいいると、それでコミッションのメンバーに2人出すと言ったんだけど、「なに、学会がないじゃないですか。」というようなことを言われたわけですよ。ドイツもイギリスもそうですけど、みんな雑誌を持ってるわけですよ。そういう意味からホントの意味での学会としてね、一般講演なんかもし、雑誌も出し、そういう体制を作り上げていく必要があったんです。で、いろいろ猪木先生と話しているうちに、最終的には一旦猪木先生にお願いして、やったほうがいいんじゃないかなと決断されたんじゃないかなと・・

盛下 勇：それから、猪木先生をヘッドにした阪大の微研が頑張ったんですよ。お金は猪木先生が何とかするとして、阪大だけではできないから、それで中林先生とかいろいろな先生を巻き込んで、それでやるぞということになったと。

渡辺良雄：それでやっぱり、幹事になっちゃうとね、寄付も集めなくてはなんないし、いろんなことをしなきゃなんない。それで、団さんに一回聞いたことがあるんだけど、「僕なんか原生動物となんも関係ねーんだよ。」ってね。で、すぐやめちゃうっていうか、名前は貸すけど出てこないようなメンバーでやってますね。

高橋三保子：いや、本当言うと、お名前がこう並んでいるのを見たときに、この先生たちが、どういう積極的なお気持ちでね、入ってきたのか、それから、何がきっかけでもう関わらなくなったのかと、そういうところを知りたかったのですけど。そもそも名前を貸しただけじゃ・・。で、それにしてもとにかく1962年に、一応第一回の原生動物学会が発足ということになったわけですよね。

盛下 勇：ですよね。一応ね。

渡辺良雄：いやだけど、成立はしてないのよ。したい、っていうのだけを出したみたいなもんなのね。

高橋三保子：あ、そうですか。さっき第２回の写真を見せていただきましたけど、これは何年だったんですか？

盛下 勇：それはもう、正式になっている・・

高橋三保子：正式？

渡辺良雄：それで出発したわけではないんだもん。

高橋三保子：あ、これつながっていかないんですか。この話は。

樋渡宏一：第１回はね、藤田先生が大会長で、小平の家畜衛試でやったんです。

高橋三保子：すると、1967年になるんですか？あ、そうか。そうすると、ずっとこの間はシンポジウムだけはやってた。

渡辺良雄：やってた。

高橋三保子：そうすると、14年して、第１回の学会というか、一応正式の学会の成立ということになるわけ。

盛下 勇:その間は何というかな、「助走期間」というか。阿部先生の夢もわかると。何とかしなきゃいかんと。それに理解を示したのは猪木先生だったんです。で、猪木先生を会長にして始まったんです。

高橋三保子：第１回は、藤田先生が大会長をされて、で、会長は猪木先生だったんですね。

渡辺良雄：そうそう。

高橋三保子：じゃ、猪木先生はずいぶん長く会長をやってらっしゃいましたよね。

盛下 勇：ええ、もう長い間ご苦労をおかけしましたね。

高橋三保子:じゃ高田先生、何か1960年当時、67年ですか、先生のお名前も出ていますけど、思い出になるような何かございませんか？

高田季久:私もね、42年の学会以降のことは割りに覚えているんですけども、1962年、すなわち1937年くらいですかね、あの時代のことはよくわからないですね。

高橋三保子:だから、何度か立ち上げようとした努力があってということですね。

渡辺良雄：そうそう。

高橋三保子:だから、正式発足までは、14年かかっているということですね。

高田季久：なるほど。

高橋三保子:そういう、いろんな難産の末に産まれてきたのが今の原生動物学会だということになるわけですね。

樋渡宏一：そうです。

渡辺良雄：そうですねぇ。

樋渡宏一:このメンバーはね、全部原生動物をやってる人ですよ。

樋渡宏一:これが、一番ちゃんとして学会がスタートしたという、1967年。

渡辺良雄:本当は、ぼくの先生だったんだから、悪口は言いたくはないんだけど、やっぱりね、阿部先生は非常に特異な先生だったんですね。一方、学問的には大変優れていて、書いてある原生動物への思いとか、それから分野はどういうものを入れたらいいかとか、今見たっておかしくないんですね。

高橋三保子:昔から、うちらが進歩がないっていうか、今でも通用する呼びかけだと思うんですよね。

渡辺良雄:例えば、フリーリリビングなんかだったら、生理・生化学なんかがどんどん進歩するだろうなとか、遺伝学・免疫学は樋渡さんなんかがいてちゃんとやるだろうなとか、そういう観念は持ちながら、寄生虫の方ではこういう治療だとかこんなことが行われて、寄生虫学会の中の一部分として原虫を使っている人たちが相当にいるなと、で、猪木さんから言われて、獣医もまさにそうであるとかね、そういうんで獣医もいれなきゃいけない、それから、えーと、水処理の件に関してもね、だいぶ前から知ってんだ、彼がね。それで、結局ヨーロッパの、あれは確かドイツの川かな、*Vorticella*とかそういったものが浄化槽の中でかなり役に立ってると、そういう海洋の生態学とか、淡水の生態学のようなところでも役立っているところがあるとかね、ずいぶん前から言ってたよね。だから、そういう全体に対する見方っていうのは極めて正しかった。分類なんかも相当やってきた人だったから、Corlissなんかに対しても、原生動物だけを入れるのかとか、クロロフィルは持ってないけど、似たような色素で生活しているようなやつも入れろとかね、いろんなことを言ってきたと思います。で、インクルードできる原生動物ってのはこんなもんだよってのは、ちゃんと阿部さんの言う通りになったと思います。しかしね、要するにadministrationが苦手な人だった。

樋渡宏一:結局、だからね、猪木さんが会長になってから、これが正式にスタートできたわけよね。阿部さんが会長ではだめだというわけ。

盛下 勇：それで、猪木先生は終生、阿部先生の夢の、日本で国際学会をやるということに執念をかけたわけです。

樋渡宏一:しかし、なんとか猪木さんに会長をやらして筑波のコングレスをやらしたかったんだけど、ぽっくり亡くなっちゃったんだよね。

渡辺良雄:だからさ、そういういきさつがあったから、筑波大学で引き受けたんだ。第二回の国際原生動物学会議から、3回目か4回目の時に日本で立候補したんでしょ。ところが引き受け手がいない状況で、筑波でね。あの時は樋渡さんはコミッショナーになっていましたっけ？

高田季久：なっておられました。

樋渡宏一:会則によれば日本はもう一人出せるからもう一人出せって言ったら、野澤さんにあんた出ろって言われてね、何かそれで出た記憶が・・

渡辺良雄：とにかく猪木さんが、第何回だったかな、の会議の時に、日本がやりたいと手を上げた。コミッショナーの投票をしたら、じゃ日本がやってくださいって話になっちゃったわけね。

盛下 勇:それも、猪木先生が阿部先生にある意味でほれ込んでてね、阿部先生の夢をなんとかしないといかんと、で自分が会長の時代に、っていうんで手をあげたんですね。

渡辺良雄:あのね、僕の感想なんだけど、阿部先生を

まともにサポートする人ってのはね、ま、僕なんかは教室員だからボスをちゃんとさせなきゃいけないという、そういうことはあったけど、だけどよその人で阿部先生を本当に一生懸命サポートしようっていうね、そういう人はね、まぁ100%いないくらいの状況だったんだ。そのくらい、わがままだったんですよ。しかし、猪木先生だけは割と何でも受けとめてくれていたような面があるんだよ。

盛下 勇:それと、尾崎先生に聞きたいと思ってんですけどね、猪木先生が「よし、原生動物」って言ったときに、トリパノソーマやってたでしょ、猪木先生が。それで、阪大が核になってくれたわけですよ。

渡辺良雄:だから、それまでは、僕らは中林先生もあんまり存じ上げないわけです。

盛下 勇:会ってないわけでしょ。

渡辺良雄:松林さんだけは、出てた。藤田先生もそういう意味で猪木さんから紹介をされて。

高橋三保子:なんか、学会を立ち上げるというのも、すごく大変なんだけど、立ち上げるに当たってはね、すごいリーダーシップを持った方がいらしたんだなぁということは思いますよね。

盛下 勇:会社と同じですよ。顔になる先生、実際に動いてくれる先生、阿部先生ひとりでは両方できないってことは、ある時にわかったわけですよ。

高橋三保子:揃わないといけないんだね。

盛下 勇:過去のことって言うのは、本当に阿部先生のね、熱意だけですよ。

渡辺良雄:熱心だったことだけは間違いない。

樋渡宏一:確かに間違いない。だけども、こりゃ阿部さんとね、猪木さんのね、バトンタッチという、これがなかったら原生動物学会はないですね。

渡辺良雄:ない、ない。

樋渡宏一:うまくバトンタッチできたなと・・

高橋三保子:あの、猪木先生が会長でしょ。阿部先生は幹事ですか？あ、編集に降りてますね。よくできましたね、そういうことが。

渡辺良雄:すごく不思議なことだった。僕にとってはね。

これからの学会に期待すること

高橋三保子:昔ね、まぁ話として、例えば柳生先生と稲葉先生の論争とかね、そういうことを聞くんですけど、やっぱり相当個性の強い、主張をする方たちがいたんだなぁというのを感じますね。

樋渡宏一:あれは法政でやった時かな。柳生さんが、電顕見て、バクテリアをえり分けて別々に食べると話したら、稲葉さんがカンカンに怒ってね、かみついた。

高橋三保子:なんかそういうような、生き生きとしたエピソードになるような話が今はないというのは、多少残念ですね。

樋渡宏一:そういう、何てのかなぁ、ある程度年を取った人が本気になって議論するっていうのが、なくなったね。

高橋三保子:学会に期待するというようなことから言うと、どういうことを・・・

盛下 勇:さっき言ったように、今ね、原生動物の再ブームなんですよ。僕は去年NHKの学校放送の理科を面倒みましたし、今度NHKエデュケイショナルかな、そこでね、原生動物の見方の番組を作るんですよね。ここまでようやくやってきた。ですから、第二期の原生動物の時代に入ったと思います。先生方のような非常にベーシックなことをやってる方と、もっと応用をやってる人と、きれいに分かれてきたという、そういうことで、全部、いろんな分野があっていいよっていうようなムードになってきた。猪木先生もそれでいいよって。

渡辺良雄:僕はね、阿部先生くらいの時代の教室運営というかな、そういうものを考えるとね、大将さえ引っ張り込めば弟子は付いてくると、そういう考え方。で、僕は根本的に違うと思ってたから、要するに、一人一人の研究者が、その学会に出たときにメリットがあるかないかということだけの話だとね、ずっと思っていたんです。今でもそう思ってるけど、やっぱり学会員がね、この学会に何か得をすることがあるなって、メリットが意外とあるなって、そういう学会でないと、もたないですよ。これだけいろんな細分化された学会がたくさん出てきてて、だからどこの分野でも、そりゃ寄生虫であろうが獣医であろうがフリーリビングであろうが何であろうがね、出てて、人の話を聞いたときに、あれ、思い当たるなとか、何かそういうものがない学会は長持ちしないんじゃないかな。

盛下 勇:「日本原生動物図鑑」というのがあるでしょ。あれ、猪木先生だからまとまったんですよ。猪木先生が講談社を相当口説いた。あれは図鑑じゃないですよ。半分が総論ね。柳生先生や重中先生が、あと斉藤實先生、が頑張ったんですよ。あの本ができたことで、原生動物学ってものがあるんだと、原生動物学会を知らしめることになったと思いますよ。2版が出たそうですね。改訂しないで。

高田季久：そう、そうです。２版はいつ出たのかな？

高橋三保子：また需要が出てきたってことですね。

高田季久：中心になってやったのは、猪木先生、当然猪木先生ですよ。ほとんどの原生動物の先生方が非常に協力していただきましたね。

盛下 勇：先生方の世界は細分化されましたけど、今、またある意味ではね、環境が立ち上がってきましたでしょ、ものすごくね。原生動物を使ってバイオアッセイをやるとかね、そういう世界になってきたんですけども、原生動物を扱ってわかる人がさっぱりいないんですよ。

高橋三保子：ま、それはもう、盛下先生に会うたびくらいに言われているんだけど、ほんとに原生動物をわかる人がいなくなって、これからどうするってのが非常に・・・。今、日本にどういう生き物がどのくらいいるのかという調査に、日本分類学連合というのが動いているんですよ。ところが、今日も評議員会で話題になったんですけど、これに日本原生動物学会がどういうふうに答えていくか、すぐ答えられるグループが出来ていないんです。どういうようにして答えていこうかというグループをね、作っていこうかということなんです。答えられるのか答えられないのか、そういうことも含めて検討しようと思っているんです。原生動物学会という生物の分類群を頭に冠しているから、それなりに責任があろうかと、いうことなんですけどね。

渡辺良雄：要するにね、今、いわゆる原生動物の分類っていうことをやってる人が非常に少なくなっちゃったわけだよ。動物学会の分類関係だって、少なくなってるもの。それこそ、北大くらいだけかな。他はもう材料として使っているだけなんだよ。原生動物はどうかって言えば、やっぱりポピュレーションが多いのかな、アメリカの方がいまだに原生動物の分類とかそういうことに関しては、日本よりずっとやってんじゃないかな。遺伝子やなんかのことに関しても。日本で僕はこれはしょうがないと思いますよ。

高橋三保子：例えば遺伝子でもってね、やっていけるんじゃないかという考えもあるわけです。だけど、それには今、形態種で分けているものを基礎にしているわけですから、そこに問題ないのか問題があるのかということがですね、そもそもない。形態種でもって分けられる人がいなくなってるというところがね。

渡辺良雄：そういう人を育てようったって、無理なんです。だから、無理やり学会で、あんた分類やってなさいって言えないでしょ？いないのにやろうってのは、荷物が大きすぎるんですよ。

高橋三保子：学会で、どれだけ関わりうるかということですけど。やっぱり全部は無理としても、少しでもわかるところがあったら。例えばルーメンプロトゾアなら少しまとめられるとかね、フリーリビングでも繊毛虫だったらなとかと、そういう人たちが関わってくれるというんだったらその中でやっていくとかね。藻類って言ってる方は原生動物学会には今んとこ入ってきていないわけですよ。そういうものの連携みたいなことを学会でやっていけたらと思うんですけど。

渡辺良雄：動物と植物がいる中でね、植物の分類はね、結構やってるわけですよ。今でも。不思議なんだけど、やっぱり大切なんだよね。で、学問分野として論文が書ける状態なのね。動物のほうはね・・・

樋渡宏一：東北大でいうと、講座は先生が動物分類学講座。その後釜が別の分野の人になってしまった。それだけの話だ。

渡辺良雄：全部、似たような状況があるんですよ。

樋渡宏一：文部省の力で変わったんじゃないね。

盛下 勇：この変なバッジ付けてるのは、アメリカにね、マイクロスコピカルソサエティーというのがあるんですよ。そこの唯一の日本人なんですけどね、これ学会でありながらね、教育システムを持ってるんですよ。通信教育で。このようなことは行政側にもあります。

渡辺良雄：いや、そりゃだから、行政だけじゃなくって、例えば分子生物学の人でも、分類学ってものが日本から消えちゃまずいなっていうふうに思ってる研究者はいるわけよ。しかし、ほんとにやる人が出てくるかって言うと、出ないというのが、今の世の中の趨勢なんですよ。

盛下 勇：ま、そっから変えなきゃいけないんでしょうけどね。

渡辺良雄：だけど、変えるっていってもね、やっぱりそう簡単に変わるもんじゃないんですよ。

盛下 勇：元に戻りますけど、猪木先生、あるときに社団法人化しようかって言ってたんですね。原生動物学会を。自分のご自宅を提供すると。で、その頃はゼロックスもインターネットもないから、みんな先生方が文献を持ってるわけでしょ。個人個人でバラバラに持ってるだけ。それをせめて社団法人化して、集めるだけでもいいじゃないかと言ったことがあるんです。ですから、先生のおっしゃることもわかりますけど、実際僕も東京水産大学で講義しててもね、要するに就職口さえあればやりやすいんですよ、今の若いものは。行政の方は、何とか間違いのない原生動

物の同定をしてくださいと希望してます。ただし、アセスメントに関係してですけど。それでコンピュータ分類学っていうか、顕微鏡で見たままをインプットすると、こういう種類だとわかるソフトを作りたいという申請を書くと、わずかの研究費が付いたりするようになってきました。

高橋三保子：同定学ですよね、今欲しいのは。

盛下 勇：そういうのがいないんですよ。

高橋三保子：そうですね。どうやって種を決めてくかという訓練ができてないですね。だから、手のつけようがないっていうか。

盛下 勇：それを、ある財団でやろうかって手を上げてね、応用生態工学研究会という学会を作ったんです。それは、工学の先生と生物の先生と、一緒にやっていこうというもんなんだけど、ところがね、顕微鏡下の生物を扱っている先生が少ししか入ってこないんですよ。それで困っちゃってね。ですから、まだまだ割り切っていただけば、先生方がずっと歩いてきた、いわゆる本格的な原生動物学と、多少は違ってくるかも知れませんが、結びつきが出てくると思うんですよ。自治体なんか、特定の部門ですが人を欲しがってるんですよ。厚生省がソフトコンタクトレンズってあるでしょ、あの水晶体とあの間に、アメーバがいるのだそうです。でも種がよくわからないらしいですね。それがわからないんなら、行政が態度を変えて、ソフトコンタクトレンズを使い捨て、または消毒ってことに切り替えたわけです。隠れてるんですね、応用の方はね、需要はいっぱい。だけど、全体としては原生動物の研究者は少ないから、手が回らないって言うのが事実でしょうね。そう思いますけどね、今後のことを言うんならば。

高橋三保子：今後のことを言うのならば、何かありませんか？

高田季久：このごろ、私らの方の学会もだんだん細分化されましてね、一年に学会１０回くらい出なければならないようになって来ましてね、もう、到底この年になって出られませんのでね、ついつい原生動物学会の方をさぼったりして、申し訳ないと思っています。

高橋三保子：どんどん出てきてくださいよ。

高田季久：今度、学会が二つ重なってましたよね。そうしますとね、なかなか私、出てこれないんですよ。別の仕事があるんで。大阪市と区から頼まれて、職員の健康診断、ほとんど私一人でやってるんですよ。研究をやる人は増えてきているんですよ。分子生物学を使ったり、免疫学を使ったり、使ってやるのはどんどん増えているんだけれど、病気の診断に関われるような医者は少なくなってきた。結局、そりゃ、学位を取ろうと思ったら、基礎的な研究を、おまけに横文字で書かないといかんでしょ。ところが、あの、アプライドの方は、疫学も含めてですが、分類なんかに入っていくと、時間かかるだけで、それを認めてくれないですから、だんだん減ってきましてね。

盛下 勇：これはあの、自分のことで申し訳ないんですけどね、こういう社団法人があるんですよ。CDを作ったんですが、その中にね、活性汚泥動物園てのがあるんですけど、それが原生動物なんですよ。950ページ分のうちの一部に、下水に関する原生動物が全部入ってます。毎年毎年の、原生動物の、写真と効用を宣伝してますけどね、そういう面でもね、まだありますよ。

樋渡宏一：活性汚泥動物園って、これに全部入ってるんですか？

盛下 勇：だいたい日本の下水処理場に出てくる代表的な種は入ってます。

高橋三保子：これは、生きてる像で入れてるんですか？

盛下 勇：ぼくが撮った写真を、そのまま入れてあります。

高橋三保子：ほんとは動くのが入ってるとね、非常にわかりやすくなると思うんですよ。動きっていうのはすごい情報ですね。

盛下 勇：原生動物として出てるのは、みんな「図」でしょ。

高橋三保子：そうそう。見えないんですよ、ああいう風には。訓練してないんじゃもう、わからないですね。

盛下 勇：僕のはあえて、同定が間違えてもいいやと、写真で出そうと、で、写真ですよ。

高橋三保子：何かがあればね、後でもそういうデータベースになってれば補正が効くんですよね。

盛下 勇：それを作りたいってのがね、北大なんですよ。分類学センターでフーズフーを作るって言ってましたよ。先生方を含めてね。原生動物で、どういう分野の研究をおやりになっている先生がどこにいると。リタイヤしようがしまいがね。

盛下 勇：見上先生がすごいことを始めましたよね。NTTと手を組んでね。

高橋三保子：あ、そうですか。ちょっとわかりません。詳しく聞いてないから。

盛下 勇：今度、聞いてください。面白い、子供が図鑑を作れる、顕微鏡見てね。今度、ブロードバンドになりましたから、動くのでもいいんですよね。

で、ま、一つの例としてね、こういう世界でも需要がありますよと。もちろん、先生方の世界でも、まだまだ足らないんでしょうけどね。

高田季久：医学関係の連中がこのごろ原生動物学会にあまり出席しなくなりましたね。ま、さっき言ったような原因なんですよ。結局、基礎的な研究にずーっと引っ張りこまれるもんだからね、学会に出てる時間が非常に制限される。

高橋三保子：皆さんやっぱり、一番勝手があるとかね、そういうことで学会に出るところを決めてところがあるから‥。えっと、洲崎さん、何か、記事になりますかしら？へへへ、ちょっと心配なんだけど・・・

洲崎敏伸：えそうですね、樋渡先生の方からも、今後の学会の将来に向けて、何か一言ございませんでしょうか？

樋渡宏一：いや、あえて言えばね、僕の門下とかね、なべさんの門下がね、大半を占めるのはよくない。

高橋三保子：大半なんか占めてないですよ。

樋渡宏一：かなり目に付くじゃない。このごろ、発表を見ると。もう少しヘテロにしないとだめですよ。

渡辺良雄：そりゃそうだね。

高橋三保子：それは、ヘテロにしたいんですけどね。ヘテロな状態というか、ヘテロだからこそ面白いというそういうことになるといいんですけど、場合によってはね、こう内輪で集まるから楽しいみたいな、そういうことになったらまずいかなと・・・

樋渡宏一：日本は、農村社会だからね、本質的には。だから、要するに出る釘は打たれるでしょ。異質なものを尊重するっていう精神状態が無いんだわ、日本には。

盛下 勇：そういう学会になってくれればいいんですよ。

樋渡宏一：日本の社会はね、同質なものはカンファタブルなんです。異質なものはなぐっちゃえ、おんだしちまえという、そういう社会だからね。それ、いつもよく感じますね。全然アメリカと違うね。アメリカは、出る釘は面白い、面白いって、こう持ち上げるんだもんね。

盛下 勇：今回の学会発表でもね、土壌の中の原生動物を使って、原生動物の多様性で土壌の評価をしようとしている発表があるわけですね。そういう人が出てきたからね、だから、アカデミックプロトゾーロジーとアプライドと、今ヘテロにね、どういう風に生きていくか‥。僕はあの、先生方に怒られるかもしれませんけどね、やっぱり教育だと思うんですよ。理科教育。NHKエデュケイショナルなんて会社がね、小中高校生相手にね、原生動物の番組を作っているんですが、そういう風なのは一般の人は見ないわけでしょ。

高橋三保子：できればあまり無理なくっていうか、やれる範囲でやっていこうというのも、今やりつつあるんですけどね。

盛下 勇：活性化委員会ですか、あれだって、やり方ですよね。

樋渡宏一：しかし、水たまりからね、水をすくってきて眺めるなんて、楽しいことですよ。

高橋三保子：で、それが何だかがわかりゃ、もっと楽しいはずなんですよ。それがわからないんですよ。うじゃうじゃいるけど、何だかわからないんですよね。そのときに、こういう特徴があるのがこういう仲間だよってちょっとそういうことが言える人が増えれば、もっと面白いに違いないと思うんですね。こういう泳ぎ方だったらゾウリムシに違いないくらいしかわかんないわけですよ。残念ながら。でも、それも間違ったりしてるわけでね。

盛下 勇：いや、でもね、そっから始まんないとね。

樋渡宏一：こういうもの（盛下の作ったCD）を、もっと普及させたらどうかな。

盛下 勇：これね、毎年3000枚作るんですよ。ただでくれるんです。だから、必要ならばこういうのを配ってね、まず見てもらう。

渡辺良雄：僕はね、日本の原生動物学会って、一部屋でみんなが分野が違おうが何しようがペイシェントになって聞いてる、こういうのが日本の社会なんだよね。歴史が繰り返すかわかんないけど、アメリカじゃ完全に分かれちゃったもんね。やっぱりフリーリビングなんかで分子生物学をやっている人間は別んとこに行ってんの。だから、別のコンファレンスなんかを開いて、そこで集まってるわけでしょ。それで、いわゆる昔の匂いのするような原生動物学者は、ザルツブルグであったみたいに、同窓会みたいな感じでやってるって、そういう格好なんですよ。だから、そりゃね、さっき樋渡さんが樋渡さんや私の弟子が大勢を占めちゃまずいって言うけど、これ、ヘテロにするような努力をすれば、面白みがまた失われてくるわね。メリットもあるんだけど、デメリットもすごい大きい。それで、そんなかったるいこと、そこまでみんな聞こうねってところが、アメリカ人にはできない。だから、集団ができちゃうんでしょ。完全に分子生物学の方になっていくのと、昔からやってきたオーソドックスなものになっちゃう。中には橋渡しをする

Oriasなんかとか、何人かはいるけど。日本もポピュレーションが増えれば、同じことが起こると思う。さっき僕が言った様に、個々の人間が学会に出たときに、どうメリットを感じるか感じないかってことになる。こっちがよければこっちに行くわけですよ。ですから、みんなに満足してもらえるっていう学会はなかなかできない。しかしね、若い人が一生懸命やったなら、やったなりのことが反映されるような学会にしてあげる必要があるんじゃないかな。それから、やっぱり日本に閉じこもってるだけじゃなしに、海外も見てもらいたい。だから、若い人に国際学会やなんかの費用を出してやったりとかね。それから、いろんなところから外国人を呼んで特別講演をしてもらうとかね。そういうんだって、刺激にはなるんだよ。そういうことで、あれ、面白いなって感じてくれる人がいればね、学会は隆盛になる。

高橋三保子：ただ、あの、一応、原生動物学会になってるわけですよ。今の時代、とにかく外にアピール、存在を示していかない限り、形がなくなっていくという、そういう時代になっていく・・・

渡辺良雄：なくなったらなくなったで、しょうがないんです。

高橋三保子：いや、やっぱり、ある限りにおいては何とかこれを活かしたいと思うじゃないですか。

渡辺良雄：でも、頑張ろうと思っても頑張れない時ってのがあるんでね。

高橋三保子：そういう消長を見てこられた方はそういうことをおっしゃる・・・

渡辺良雄：そいで、じゃ、植物も入れましょう。クラミドモナスからイーストなんかを入れてごらんなさい。イーストの方が人間に近いんだから。遺伝子ではね。テトラヒメナやゾウリムシなんかは相当に遠いんですよ。おんなじ原生動物ったって、もう、ダイバーシティーがすごい進化の過程で起きちゃっているから、そらもう、アメーバと人間くらい違うわけですよ。そんな状況の中で、とにかくつぶれようが何しようが、世界の中でアクティブに働けるような人たちがこの学会の中に入ってるってことが、すごくやっぱり必要なんじゃないかな。一つは、阿部先生も何かに書いているけど、原生動物ってのは、それなりに、見てくれはおんなじような顔をしてるけど、大変長い、何億年だか前に分化してるわけですよね。そういう生物ですから、非常に特殊な現象があったりするわけよ。でもそんなものの中に、生物全体に通じるような謎があるわけよね。ですから、必ず、やってるものが、どこかの時点で何かに繋がるものがあるからね、そりゃ、小核から大核ができるっていうことだって、免疫や何かと似たようなことが起こってる。だから、そういう特徴をうまくつかまえることができるようになってくるような下地がある人がどんどん仕事を進めてもらえばね、原生動物の特徴っていうかな、あ、この材料を使っててよかったなっていうね、そういうことが出てくると思うんですよ。だから、普通のマウスとか人間とかだけでしかできないようなものじゃないんじゃないですか。タネは同じものから生じたんですから、どんなに進化しようが何しようが、痕跡がどっかに何か出てる。

高橋三保子：何てのかな、例えばね、そういう芽が出てくるかどうかと、芽を伸ばすというところから言ってもね、私、heterogeneityがたぶん大切なんだという気がするのね。

渡辺良雄：だから、特殊なことをやってるっていう認識を持たないで、これは生物がやってることということで対処していく必要があるんじゃないかな。

高橋三保子：別の分野の人が見たときにね、あれっと思うことがあると思うんですよね。そういうのが何年にいっぺんか、出るか出ないかわかんないけど、出るかもしれない、っていうところをね、期待するんですよ。いろんな分野の人が集まって話してみる、そういうところに学会としての意味があるんじゃないかなと、思います。

渡辺良雄：そうそう。

盛下 勇：あの、非常にレベルの低い話をしますけど、とにかく見せてやることですよね。教科書の上でツリガネムシは知ってる。それだけです。ゾウリムシは知ってる。そっから先には行かないです。ですから、先生方がね、キャリアあるんだから、やさしくね、話して下さいよ。

渡辺良雄：いや、でも、そんなことをやっても我田引水になっちゃってね、僕の弟子には僕の弟子に、ある程度のラチチュードの中で泳がせるくらいしかできないわけだよ。だけど、学問ていうのは、初めは大将の言うとおりに守ってやるわけ。そのうちに、何らかの調子で、離脱する必要があるんだよね。破門まで受けないかも知らないけど、大将の考えてることと違うことを考えるようになるんだよね。それが招じて今度はその人が独立して、いい仕事をするようになる。もう、当たり前の話じゃないかな。だから、自分の中の殻の中で納まってるような弟子ってのは、見込みがないんだよね。本当は。違うことをやっていいんだよ、逸脱して。

盛下 勇:先生、申し訳ないけど、学長なんだから、そういう教育方針では・・

高橋三保子:いや、お辞めになったってうかがいました・・・

樋渡宏一:辞めたの？

渡辺良雄:9月の30日に。へへ・・

高橋三保子:ええと、何かもう、中途半端かもしれないけど、そろそろ・・・

渡辺良雄:だから、結論をいえば、大変熱心な阿部先生という学問的見識のある先生がいたんだけど、アドミニストレーションが極めて上手でなくて、このままでは学会がどう考えてもできない状況になっていた。それにもかかわらず国際学会の影響もかなりあったように思います。そういうものを受けて、やっぱり猪木先生にバトンタッチをする状況っていうかな、それがあって、今、35年を迎えてるんだということです。阿部先生と猪木さんがいなければ、たぶん、日本原生動物学会のこんなまとまりはしてないと思っています。

樋渡宏一:たぶん、ね。

盛下 勇:それははっきり書いてください。

高橋三保子:今日はどうも、生々しいお話を含めて、ありがとうございました。お話は尽きないだろうとは思いますが、7時半までということで、この後は若手の会の懇親会というのがあります。皆様もお若うございますので、是非ご参加くださいということですので、どうぞご参加いただきたいと思います。